文献調査（和文）

Ⅰ．調査方法

1）更年期、または、更年期の女性について書かれた日本で刊行された和文の文献（翻訳文献を含む）、および、雑誌・新聞記事について、可能な限り遡ってリスト化し、年代ごとの視点や内容の変化を分析する。

［検索方法］

和文文献：①国立国会図書館の蔵書目録（CD-ROM）から検索し、リストを作る。
②国立婦人教育会館情報センター、東京ウィメンズセンター資料室、都立中央図書館、埼玉県立図書館等の蔵書目録等から補完する。

新聞記事：①国立婦人教育会館情報センターの新聞切り抜き資料（WE-NET）からタイトル検索し、リスト化。（７０紙）

雑誌記事：①大宅壮一文庫の記事目録から検索し、リスト化。（２００誌）
②国立婦人教育会館情報センターの雑誌記事目録より検索し、補完する。

2）以上の内、更年期にある女性自身の視点で書かれた文献については抄録を作成する。

Ⅱ．調査結果の概要

1）検索対象期間と検索総件数

〔表１　検索期間と総件数〕

	検索対象期間	総件数
和文文献	明治期以降～1996	１０５　件
雑誌記事	1979～1996	１３８　件
新聞記事	1983～1996	１７９　件
その他*1	－－	件

*1 自治体・女性団体刊行物、ＡＶ資料等を含む、参考資料と参考文献

2）内容別内訳

〔表２　内容別内訳〕

和文文献　１０５件	雑誌記事　１３９件	新聞記事　１７９件
医学専門書　２３件	専門誌　２９件	人物記事　３１件
一般向け医学書　６２件	女性雑誌　７５件	一般記事　９０件
更年期体験　１２件	一般誌　３８件	女性の活動　１７件
社会科学分野*1　８件		更年期特集　８回
参考文献（老い）　１６件		（４１件）

*1社会学・心理学・女性学などに属する文献

Ⅲ．調査結果（１）文献の推移

１）文献件数の年代ごとの推移

〔表３　年代別文献件数〕

年代区分	和文文献	雑誌記事	新聞記事	備考
1970 ～ 1974	4	－－	－－	新聞記事は1982以前の資料無
1975 ～ 1979	7	1	－－	
1980 ～ 1984	１１	2	2	
1985 ～ 1989	２９	２３	6	
1990 ～ 1995	５８	９４	１１１	
1996	8	１９	６０	*1　1960年代の文献が 4件ある為、総件数に満たない
計	１１７*1	１３９	１７９	

２）和文文献の視点と内容の推移

〔1970年代〕

1970年代までは、医学書が中心。松浦篤実(1957)は女性の更年期、男性の更年期、更年期の精神障害について書かれいた。(1) 翻訳書では、ウィルソン(Wilson 、1967) に、ホルモン療法が紹介されている。ウィルソンの「女性よ、永遠なれ。どんな女性も生きながら朽ち果てる恐怖から逃れられない。」という言葉は、女性の「若さ＝美しさ＝性的魅力」という囚われの象徴として、多くの文献に登場する。(2) アメリカでは、1977年に医師でない女性ロゼッタ・ライツによって、自分自身の更年期に積極的に立ち向かった経験を書いた本が刊行されたが、邦訳が出版されたのは1983年である。(3)

女性の書いた本としては、1979年に袖井孝子による「収穫の世代　中高年の生活構造」「中高年女性学」の２冊がある。(4,5)

〔1980年代〕

女性が更年期について語り始めた80年代。玉谷(1981)、女たちの ﾘｽﾑ編集委員会 (1982) が、女性の体や更年期について、女性自身が語り始めた最初である。(6,7)　野末(1983) は女医である著者の臨床経験と、30代から50代の女性を対象としたアンケート調査をもとにした更年期女性の実態から、更年期を考えた初めての本である。更年期におこる体の変化を正しく理解し、症状を軽減し明るく素敵に過ごしてほしいと提案している。(8) これらの文献から、日本の女性にとっての、閉経期・更年期は「女性性の喪失」という閉経感はあるものの、解放感もあることが明らかにされた。「耐える、隠す」必要はなく、更年期について「よく知り、語る」前向きな姿勢が多くの女性に受け入れられ、1984年以降、女性向けの「更年期医療」の本が、毎年５、６冊のペースで出版された。

セルフ・ケアとセルフ・ヘルプ。「先輩たちはどのように更年期を過ごしてきたのか」どうしても知らなくてはならなかったからと企画された駒野(1985)は、更年期について語り合うことが、更年期を知り、更年期を生きることであると示唆し、フェミニストセラピーやヨガの活動グループを紹介し、セルフ・ヘルプ（自助）発想を提起した。(9) 期待のホルモン補充療法についての臨床例も少なく、医者によって対応はまちまちで、ドクター・ショッピング（病院の渡り歩き）をする女性も多かった。更年期の症状についての特効薬はなく、時期が過ぎるのを待つという考えが根強く、女性にできる積極的方策としては、理解ある医者を探すか、症状を改善し、予防する、自己管理（セルフ・ケア）であった。予防に注目する医師も多く、「女ざかりの医学－35才からの健康ノート」（樋田、1986）や「30才からの女のからだの本」（佐々木、1988）など、更年期前からのセルフ・ケアに注目した本も出版され、幅広い年代の多くの女性が、更年期の対象となるようになった。(10,11)

素敵な「老い」を迎えよう、「老い」に備えようと高齢化社会が現実味を帯びてきた1985年前後は、「老い」の視点から女性の生き方を問い直す文献が増える。(12,13) ユック舎の「シリーズ・今を生きる」は、現代の女性が直面する様々なテーマを取り上げ、ある一つのテーマについて、様々な立場の女性たちの体験や意見を集めた連作だか、「41才」「51才」など年齢をテーマにした号では、中高年期にある女性がいくつもの荷物をその肩に負いつつ、自己実現の道を探る姿が描かれている。(14,15) また、女性のグループが更年期に取り組むことが増えた。(16)

80年代半ば、精神医学的視点からの考察が翻訳された。ミシェール・ティリエ(Thiriet、1985) とアン・マンコウィッツ(Mankowitz、1986) は、精神医学的、心理学的視点から更年期をとらえいる。前者は、50代になった女性は、それまでの人生で刷りこまれた"50代の女性の社会的イメージ"によって、自画像(ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ)を歪められてしまっているが、それを受容する必要は無く、自ら新しい自画像を持つべきである、それこそ、50代の女性に与えられたチャンスであると主張する。(17) 後者は、閉経によって自我の危機に陥った一人の女性が、夢分析で意識下の自分に気づき、自分らしさを再発見し、受容していく過程を紹介している。更年期の精神的危機は"女性性"の危機であり、更年期は自分らしさ"個性"を発見する過程であると言う。(18)

〔1990年代〕

更年期は女性なら誰にでも訪れる、第二期成長期への通過儀礼である。ゲイル・シーヒー(Gale Sheehy 1993)は、更年期問題に新しい視点を提供した。一つは、更年期はすべての女性に訪れる。更年期治療は、女性の「若さ＝性的魅力」を維持するために受けるのではなく、女性自身が自分らしく生きるために受ける。「若さ」と「美貌」は女性性の絶対的価値ではあり得ない、新しい女性性としての価値が必要と言う視点。また一つは、老年期の入口と言う発達段階説による更年期の位置づけでは、閉経以後の30年以上の人生を生きられない。新しい枠組みが必要であるという視点。この本は、アメリカでは、ニューズウィークのベストセラー 1位を10週間に渡って維持し、大きな反響を呼んだ。(19)

新しい女性観と更年期というこの視点はさらに進化し、1996年にはコレット・ダウリング(Collete Dowling,1996)が50代の女性の新しいライフスタイルについて分析し、人生50年時代発想の発達段階説による女性のイメージや"女性性"の認識ではこれらの50代の女性は説明できない、今、50代の女性は、女性として始めてモデルのいない人生を生きていると主張する。自分自身をモデルとして生きていくには、自分自身について語り合い、理解し、受け入れる人間関係が必要であるが、それは必ずしも、夫との関係ではなく、親や子との関係でもない、既存の人間関係の枠組みにはない、自立した人間同士の共生関係であ

ると述べている。(20)

40才は人生の折り返し地点であると言う視点。人生80年時代、40才になったら、「老い」への準備を始めようと樋口(1990)、上野（1990）らは提案する。(21,22) また、藤原（1993）は、中高年の再婚をテーマに「老い」の愛と性と人生に問題提起している。(23)

1990年代前半は女性向け医学書出版ラッシュ。1990年以降、更年期をテーマにした女性向け医学書は、 6年間で40冊以上、特に1993年には12冊も出ている。更年期医療を専門とする婦人科医、特に専門外来を担当したり、専門クリニックを開業している医師の書いた物が多く、内容は、更年期の体の変化の解説、症状別の対処法・治療法の紹介が主であるが、80年代に比べ、医療データが蓄積されてきたことから、ホルモン補充療法の功罪、肥満や骨粗鬆症との関連を含めたより詳しい解説も加わり、更年期障害だけでなく、更年期の病気、成人病、精神神経症など、治療を必要とする症状についても警告している。患者の”主体的選択権”認め、医師との関係の中で健康を自己管理してくよう勧めるなど医師側の医療に対する態度の変化が伺える。(24 ～35)

（出典）

1) 松浦篤実、他　1957　「更年期障害」　創元社
2) ﾛﾊﾞｰﾄ・ A・ｳｨﾙｿﾝ（増淵一正訳） 1967　「永遠の女性」　主婦と生活社
3) ﾛｾﾞｯﾀ・ﾗｲﾂ（池上千寿子、根岸悦子訳） 1983 「積極的に生きる更年期」　鎌倉書房
4) 袖井孝子　1979　「収穫の世代　中高年の生活構造」　垣内出版
5) 袖井孝子　1979　「中高年女性学」　垣内出版
6) 玉谷直美編　1981　「美しき午後へのスタート」　女子パウロ会
7) 女たちの ﾘｽﾞﾑ編集委員会　1982　「女たちのﾘｽﾞﾑ 月経・ｶﾗﾀﾞ のﾒｯｾｰｼﾞ 」　現代書房
8) 野末悦子　1983　「いい女の更年期」　主婦の友社
9) 駒野陽子、他　1985　「更年期を生きる ― 第三ステージの開幕」　学陽書房
10) 樋田勝間　1986　「女ざかりの医学 ― 35才からの健康ﾉｰﾄ 」創元社
11) 佐々木静子　1988　「あなた自身の更年期とうまくつきあってみませんか？」　草土文化社
12) 樋口恵子　1986　「生き上手は老い上手」　海竜社
13) 樋口恵子　1987　「私の老い構え」文化出版局
14) 吉武輝子、沖藤典子、他　1981　「シリーズ今を生きる　41才」　ユック舎
15) 樋口恵子、佐々木静子、他　1992　「シリーズ今を生きる　51才」　ユック舎
16) 高槻女性学グループ　1987「更年期ってなあに：更年期の過ごし方 ｱﾝｹｰﾄ調査より」
17) ﾐｼｪｰﾙ・ﾃｨﾘｴ、ｼｪｻﾞﾝﾇ・ｹﾍﾞｽ（目島嘉子訳）1985　「50歳の青春を貴女に」　誠文堂新光社
18) ｱﾝ・ﾏﾝｺｳｨｯﾂ（渥美桂子他訳） 1986 「更年期と個性化 ― 夢分析を通して」　創元社
19) ｹｲﾙ・ｼｰﾋｰ(樋口恵子訳、堀口雅子監修） 1993 「沈黙の季節」飛鳥新社
20) ｺﾚｯﾄ・ﾀﾞｳﾘﾝｸﾞ(実川元子訳、落合恵子監修） 1996 「ﾚｯﾄﾞ・ﾎｯﾄ・ﾏﾏ」　徳間書店
21) 樋口恵子　1990　「40代からの老い支度」　海竜社
22) 上野千鶴子 1990 「40歳からの老いの探検学」　三省堂
23) 藤原はるみ美 1993 「午後の伴走者」立風書房
24) 浮田俊彦　1990　「ﾅｲｽﾚﾃﾞｨのあなたに　更年期障害と肥満」北国新聞社

25）藤田拓男　1990　「更年期から女性に多い骨粗鬆症」　主婦の友社
26）東畑朝子　1993　「更年期からの素敵ダイエット」　海竜社
27）影山邦子　1993　「更年期障害 ｲﾗｽﾄ わかる指圧」　ユリシス出版部
28）野末悦子　1993　「女性ホルモン最新療法」　朝日出版
29）野末悦子　1993　「いい女の更年期（続）」　主婦の友社
30）小山嵩夫　1993　「更年期なんて怖くない」　法研
31）美馬宏夫充　1994　「こんにちは！更年期」　二見書房
32）堂園涼子　1995　「更年期かしら」　主婦の友社
33）丸本百合子　1995　「更年期をいきいきと」　時事通信
34）吉田茂子、越川法子　1995　「更年期を乗り切る知恵」　講談社
35）吉田茂子　1995　「更年期障害は漢方で治せる」　リヨン社

3）雑誌・新聞記事の推移

〔1980年代〕

80年代前半までは、極端に記事が少なく、雑誌記事では、一部専門誌に「更年期の神経症」(1)「更年期障害」(2) など、中高年特有の"病気"として紹介されている。新聞記事も 2件あるだけである。

80年代後半には、「よく効く薬」(3) とか「治せる」と言う対処療法の紹介の記事やストレスや脳との関係への指摘する記事(4) が見られる。、更年期を「女性だから必ず訪れる」(5) と捉え、女性全ての"共通のテーマ"として前向きに扱う傾向が見られ始めた。

1988年以降、更年期に関する記事急増。『婦人公論』(1988.3)の特集では、中高年期の心と体の変化として、更年期障害の体験記や閉経期の卵巣機能低下の影響について取り上げている。夫や家族との関係、対人関係のストレスに注目した記事が多い。(6)(7)

1989年は記事件数が13と多く、女性自身の"自分の体"に対する関心も高まり、"ホルモン"がタイトルに登場する。(8)「30代からの健康管理」(9) など、更年期前期（閉経前）にも注目した積極的アプローチの見られる一方、「働いている人はならない」「暇な人がなる」などと言う更年期の負い目は根強く、「男で直す女の体の不調」(10)など独善的タイトルもあった。

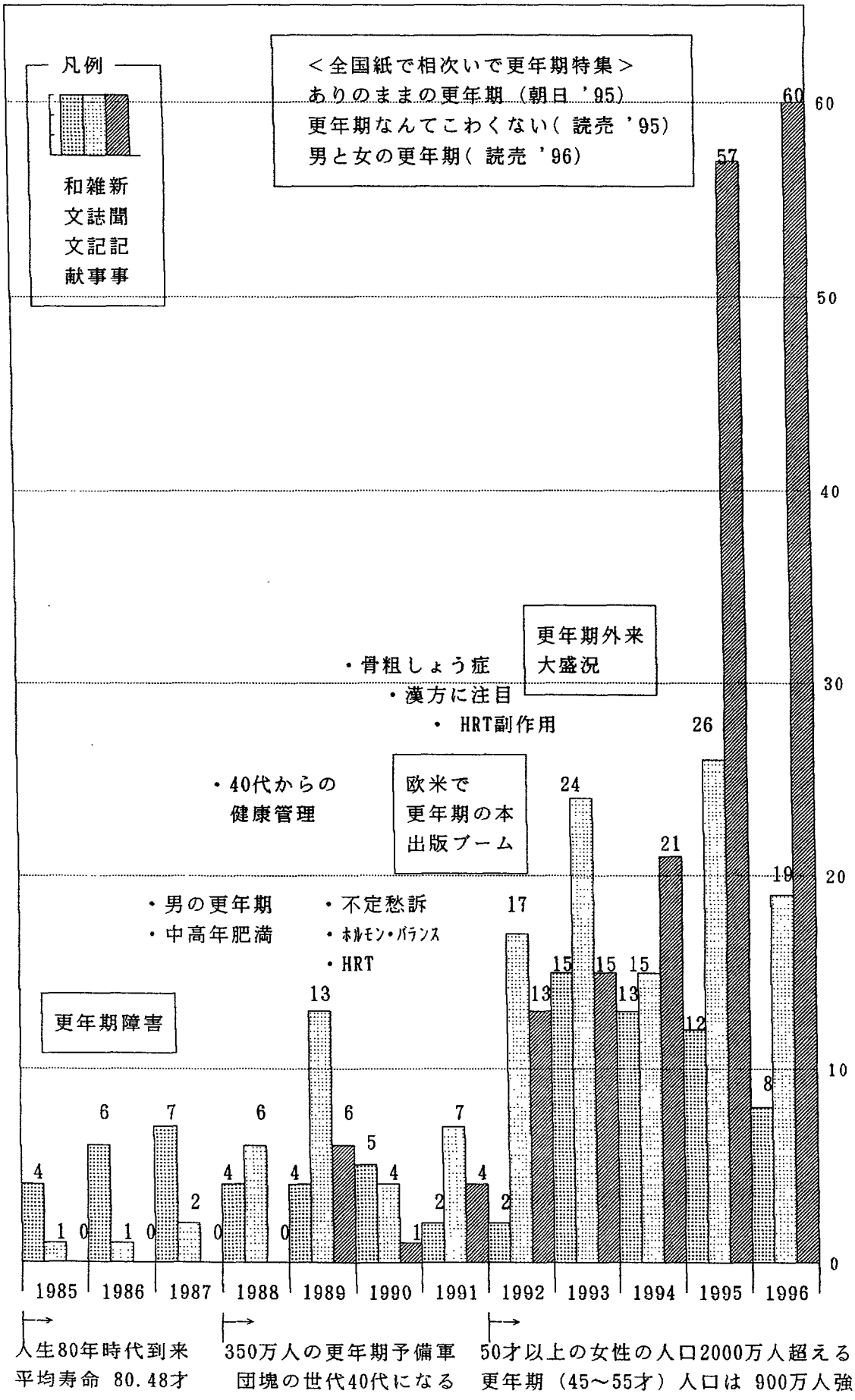
女性の関心の高まりを反映。　90年代初め、「ヨーロッパ報告　更年期の福音　ホルモン療法とは？」(11)、「ここまで進んだ更年期対策」(12)など"ホルモン補充療法"について、欧米の先進事例が紹介された。"骨粗鬆症"など、閉経後（更年期後期）の問題についても、専門誌で取り上げられた(13,14) が、「更年期の新しい選択　ホルモン療法か漢方か」(15)など、ホルモン補充療法は選択肢の一つとして紹介しているに過ぎない。日本での事例や実施している医師も少なかったため、データがなく、副作用や乳ガンの誘発に対する的確な説明は見られない。「専門外来」の必要性や「精神的療法」の重要性を指摘する記事もあった。

90年代には、更年期への関心は全国的高まりを見せ、新聞記事では、女性のワーキンググループの活動や各地の女性保健施設のオープンの記事が多く見られる。(16,17,18,19)

1991年末、女性グループによる、初潮から閉経にいたる"月経"に関する調査結果(20)が発表されるなど、女性自身が自分の言葉で、更年期について語り始めた。1992年の『婦人公論』の特集では、読者体験記を含め、医療体制への提案、更年期への気構えなど、女性たちの意識の先行と積極的姿勢が見られる。(21)　この頃の見出しには"克服する"とか"乗り切る"などという力強い言葉が目立つ。

1992年以降、雑誌記事も新聞記事も急に増えていく。次のページの〔図１〕参照。

〔図１〕過去１０年の媒体毎の文献件数の推移



日本題「沈黙の季節」）の刊行に象徴される、女性自身の意識の変化、特に、団塊の世代の中高年化によって中高年層のボリュームが増えたことによる、中高年女性の意識の変化がある。(22) 1993年には、「更年期を元気で行こう　団塊のパワーがイメージを変える」(23)など、女性の前向きで、生き生きとした姿勢がタイトルにも現れている。

"性"と"生"に関する視点もクローズ・アップされた1993年。雑誌記事件数が21件と増え、　更年期への関心が"生活"軸から"人生"軸へと視野を拡大していく。『月刊セクシャルサイエンス』の特集では、「更年期の性」「Quality of Life 無しの長生き、何になる？」「高齢化社会とホルモン補充療法」「"若く、美しく"草木もなびく時代、どれほど自由な選択が可能か　女性の生き方とHRT」「本質を見失う"いつまでも若く美しく"」など社会学的視点の重要性を指摘する意見が顕著となる。(24)(25)

「日本医療への提言　悩める更年期女性8000人の手紙」と言う記事が、『婦人公論』には載り、女性の側からの主張として、医療現場での現状（認識不足と知識不足）が訴えられたなど、女性の声が大きくなった。(26) 医師の側からは、"治療を必要とする病気＝障害"と更年期症状とを区別する必要性と、更年期症状にも治療効果にも個人差が大きいことから、予防とセルフ・ケアの重要性が指摘された。　また、男性向けのビジネス誌にも、夫の理解を喚起する記事が登場した。(27)

読売、朝日で相次いで"更年期"特集。1995年には、1月に『読売新聞』で「更年期なんかこわくない」のタイトルで7回に渡る特集をし、次いで、『朝日新聞』で「ありのままの更年期」がパート① 5回、パート② 4回、追加特集 3回と 6月末から 8月頭まで長期に特集され、さらに翌1996年 9月に『読売新聞』で再度、今度は「健やかのデザイン　男と女の更年期」と題して、特集が組まれた。女優などの著名人の更年期体験や専門外来の盛況ぶりなど最新医療動向から、職場、夫婦関係に至るまで、閉ざされた関心事ではなく社会問題としての更年期が大きく取り上げられた。(28,29,30,31,32,33)

より具体的ですぐ役立つ情報が記事になった1995年。どんな治療が何に効くのか、どんな症状に何が有効かなど、週刊誌やマンガでも取り上げられ(34,35)、女性誌では、名医紹介やハウツウなどの特集も組まれた(36,37)。積極的に取り組む医師が増え、女性医師の活躍も目立つ。(38,39,40) 関心の高まりは医療だけでなく、「エストロゲン」の副作用や経皮吸収型新薬の紹介がビジネス誌に載るなど(40,41)、医療ビジネスとしての注目度も大きくなってきた。

更年期を機に家庭内再婚を、など夫婦関係を再構築や生き方の見直しを提案する記事が、1995年以降、雑誌にも新聞にも多くなる。「夫は妻のよきカウンセラーになって」(42)「更年期障害は夫婦の危機か」(43)「肉体的苦痛だけではない　更年期の妻たちの"心の叫び"夫との関係に悩み」(44)など。

（出典）

1)深沢道子、『現代のエスプリ別冊：社会心理学』1980.3. P114-129
2)野末悦子、『女性のひろば』1981.3. P78-79
3)『壮快』1987.1. P264-265
4)『ＣＬＡＳＳＹ』1987.11. P248-249
5)『婦人倶楽部』1988.1. P307-322
6)『婦人公論』1988.3. P134-139
7)＜実戦的ストレス解消講座 3回＞　菅原明子、『THE ２１』1988.3. P134-139
8)『主婦の友』1989.2 P157-164
9)『家庭画報』1989.11. P388-389

10)斉藤信彦 ;『婦人公論』1989.12. P359-365
11)アルベリー信子; 『婦人公論』1990.9. P186-195
12)『ニューズウィーク日本版』1990.9.13. P52-54
13)閉経女性のおける骨塩量と生活調査に関する研究 渡辺美鈴 ;『厚生の指標』1992.2.3.P22-28
14)骨粗鬆症患者(女性) の生活実態調査 野川道子 荻野薫子 ;『看護』1992.6. P164-177
15)小山嵩夫 たけながかずこ 野末悦子 ;『婦人公論』1991.11.P196-204
16)関西の女性らちが冊子発行; 『朝日新聞』1990.12.14.
17)ｳｰﾏﾝｽﾞ･ﾍﾙｽ･ｹｱｾﾝﾀｰ島尻那覇市にオープン; 『沖縄タイムズ』1991.07.31.
18)ﾈｯﾄﾜｰｸ女のからだを考える会 ;『日本経済新聞』1992.01.20.
19)福岡市をモデル地区に ;『西日本新聞』1992.08.18.
20)女たちの場所づくり ;『ちいきとうそう』1991.12.1.P252-
21)『婦人公論』1992.11. P236-241/242-263/269-277/278-283/284-289
22)本音で生き始めた米国の中年女性; 『日本経済新聞』1992.11.30.
23)『ＡＥＲＡ』1993.10.25. P25-38,42-43
24)大川玲子、樋口恵子、佐藤洋子、小山嵩夫、稲生有伎子 ;『月刊セクシャルサイエンス』1993.5. P5-9/24-28/29-32/33-36/37-45
25)樋口恵子 ;『Imago 』1994.6. P246-252
26)アルベリー信子 ;『婦人公論』 1993.7. P120-128
27)斉藤信彦／野末源一; 『プレジデント』1993.9. P208-213/118-119
28)『読売新聞』①1995.01.28. ②1995.01.29. ③1995.01.30. ④1995.01.31. ⑤1995.02.01. ⑥1995.02.02. ⑦1995.02.03.
29)更年期なんかこわくない! 読者から多くの反響 ;『読売新聞』1995.02.24
30)『朝日新聞』①1995.06.27②1995.06.28. ③1995.06.29. ④1995.06.30. ⑤1995 .07.01.
31)『朝日新聞』①1995.07.11. ②1995.07.12. ③1995.07.13. ④1995.07.14.⑤1995.07.15.
32)投書から ;『朝日新聞』 (上)1995.08.02. (中)1995.08.03. (下)1995.08.05.
33)『読売新聞』①1996.09.30. ②1996.10.01. ③1996.10.02. ④1996.10.03.⑤1996.10.04. ⑥1996.10.05. ⑦1996.10.06. ⑧1996.10.07. ⑨1996.10.08. ⑩1996.10.09.
34)『週刊時事』1994.4.23. P92-93
35)『女性セブン』 1995.10.19. P189-192
36)『ＳＯＰＨＩＡ』1994.5. P339-345
37)(連載) 更年期を乗り越える12の対処法 ;『家庭画報』①1995.1.P364-365 ②1995.2.P278-279 ③1995.3.P318-319 ④1995.4.P352-353 ⑤1995.5.P334-335⑥1995.6.P314-315 ⑦1995.7.P328-329 ⑧1995.8.P310-311 ⑨1995.9.P311-312 ⑩1995.10.P416-417⑪1995.11.P352-353⑫1995.12.P334-335 (全12回)
38)野末悦子; 『セクシャルサイエンス』1994.6. P56-61
39)『クロワッサン』1996.11.25. P50-57
40)『週刊文春』1996.12.26.
40)『ニューズウィーク日本版』 1995.7.5. P56-57
41)『経済界』1995.11.21 P86
42)『家庭画報』1996.1.P325
43)『家庭画報』1996.9. P259-270
44)『日本経済新聞』1996.08.14

Ⅳ．調査結果（２）文献抄録

女性自身の体験と視点から、更年期について書かれている文献を中心に、以下の27件について抄録を作成した。文献の前の数字は、和文文献リストの番号に呼応する。

1）玉谷直美編　1981　「美しき午後へのスタート」　女子パウロ会

中年期の妻に対する夫の戸惑いを書いた「妻の中年」、「心理療法における女性の更年期」「独身女性の更年期について」「更年期障害の体験とその周辺」と言う題でそれぞれ、自分自身の体験を書いた随筆集。

2）吉武輝子、沖藤典子、他　1981　「シリーズ今を生きる　女・41才」　ユック舎

「41才」をテーマに、現在進行形の自分自身の生き様を女性自身が書いた。「女の41才」吉武輝子「女・41才　おへソの曲がり角」沖藤典子、他。

3）ﾛｾﾞｯﾀ・ﾗｲﾂ（池上千寿子、根岸悦子訳）　1983　「積極的に生きる更年期」　鎌倉書房

医師でない女性が自分自身の更年期に直面し、戸惑いながらも積極的に生きようと努力した過程を体系的にまとめた本。

ホットフラッシュ、肥満、ブルーな気分、などの症状の克服の仕方、感情表現（怒りの表出）、運動、自己検診などを自分の体験やワークショップでの経験から解説。

更年期を表現する言葉から、更年期の女性の社会的立場を分析し、マスターベーションやセックス、ホルモンについても、医師や専門家に自ら取材し情報を集め、エストロゲン補充療法を体験に基づいて勧めている。

更年期の女性が自分自身に自信を持って生きること、ワークショップなどに積極的に参加して、仲間と問題を共有すること、正しい知識とよい医師を選ぶことなどを主張している。食事（栄養）や男性の更年期についても述べてある。

4）駒野陽子、他　1985　「更年期を生きる ― 第三ステージの開幕」　学陽書房

更年期に対する否定的イメージをプラスに変えたいと考えた医師でない女性 4人が、企画し、自らの体験も含め、更年期の体験記(8人）やインタビュー(9人）、産婦人科医や鍼灸師へのインタビュー、ヨーロッパの女性達の合宿やクリニック、自助組織の紹介、フェミニストセラピーや鍼灸、整体、合気道、ヨガなどの紹介を通して、更年期を積極的に生きる事を提案している。

5）ｱﾝ・ﾏﾝｺｳｨｯﾂ（渥美桂子他訳）　1986　「更年期と個性化 ― 夢分析を通して」　創元社

ユング派の女性分析家と”空虚感を訴える一人の知的な更年期にある女性患者”が夢分析を通して、閉経期の”性”の意味（老化への心理的拒絶、夫の関係、社会的役割の変化”空の巣”症候群、男性支配への怒りと嫉妬、再生）を理解し、受容していく過程、さらに、患者である女性が自分の母親、夫、子供との新しい関係を築き、人生の後半を自分らしく個性的に生きていく上で洞察し、再発見した様々な”女性性”の問題を平易に生き生きと考察している。

7)樋口恵子、佐々木静子、他　1992　「シリーズ今を生きる　女・ 51 才」　ユック舎

女性の生き方についてのエッセイ集のシリーズ。「揺れる51才」樋口恵子、「中年の罠」井上摩耶子、「からだ－更年期をどう乗り越えるのか」佐々木静子など。

8) ｹﾞｲﾙ・ｼｰﾋｰ（ 樋口恵子訳、堀口雅子監修） 1993 「沈黙の季節」 飛鳥新社

アメリカのジャーナリストである著者による 100人の女性へのインタービューと75人以上の医師など専門家への取材を基に書かれたこの本は、ニューズウィーク誌の書評欄で10週にわたりベストセラーとなった。センセーショナルな注目を集めた理由は誰でも名を知っているような女性－「若さ」と「美しさ」という「性的魅力」あふれる女性の赤裸々な更年期の経験談への共感と、偏見に囚われていない旺盛な専門的知識の探究と洞察への信頼であろう。特にすぐれている点は、多くの調査データの裏付けられた更年期諸症状の詳細な説明、治療法の功罪の検討が、冷静に行われていることであり、更年期の女性に勇気を与える本である。

9) ｹﾞｲﾙ・ｻﾝﾄﾞ （田辺希久子） 1994 「４７歳の私に起こったこと」 大和書房

コラムニストである著者が、更年期に直面して、本を探し、医師を訪ね、友達や電話相談に相談し、セミナーに参加し、信頼できる医師を捜し出し、HRT を勧められて逡巡し、他の治療法、漢方、鍼、ヨガ、健康食品を片っ端から試し、心霊療法、アーユルヴェーダ、陰毛分析によるビタミン療法をも試し、とうとう、HRT を開始する。この経過を、ユーモラスなタッチで、しかし、真面目に真正面から書いてある。巻末に HRTと骨粗鬆症、膣の筋肉を強化するケーゲル方について簡潔に要約してある。

10) ｺﾚｯﾄ・ﾀﾞｳﾘﾝｸﾞ（ 実川元子訳、落合恵子監修） 1996 「ﾚｯﾄﾞ・ﾎｯﾄ・ﾏﾏ」 徳間書店

現代の50代の女性の直面すべき問題について、著者自身の実践を含め、率直かつ大胆な切り口で論じた啓蒙書。親の世代とは全く違う中高年期、モデルのない中高年期を、自分らしく生きる今の50代をレッド・ホット・ママと名付け、その模索と葛藤を生きている現実の中で論じている。発達段階説に囚われた年齢意識の否定。子供のい立、親の介護、親の死－『中高年期のワナ』、処世術として否定できない若さと女らしさの囚われ（容姿の政治学）、異性関係の見直しの必要性（王子様にさよなら）、更年期症状の克服－『ホルモン戦争』、自分自身の為の性生活、などについて論じた上で、今まであまり触れられなかった経済的自立『女性のための資産計画』についても言及し、『女家長』－自立した自画像を持った新しい生き方を提案している。

11) 藤原はる美 1993 「午後の伴走者」立風書房

中高年再婚についてのルポルタージュ。人生の後半のパートナーを求めて止まない女性たちの葛藤と自分探しの姿。

13) 女たちの ﾘｽﾞﾑ編集委員会 1982 「女たちのﾘｽﾞﾑ 月経・ｶﾗﾀﾞ のﾒｯｾｰｼﾞ 」 現代書館

1980年に全国規模で行った「月経に関するアンケート」をまとめたもの。13才～80才の 407名から回答があった。初潮から閉経まで月経について、女性の本音に近いところを聞き出している。閉経に対しては、女でなくなる不安、老化への不安と同時に閉経後の本音として、解放感も多いことがわかった。更年期については対談形式で、体験談が紹介されている。

15) 生活ｸﾗﾌﾞ 生協連合会編 1994 「更年期から楽しくなる」 生活ｸﾗﾌﾞ 生協連合会

生活クラブの組合員に実施した「更年期・閉経に関する調査レポート」を基に、更年期について等身大で考える事を意図した本。医学的解説、臨床例、カウセリングの症例、ホルモン補充療法についての解説、高年期（ 幸年期）というエッセイで構成さ

れている。調査は、無作為抽出による45才以上の組合員2000人を対象として実施された。有効回答票数は873 票。主な質問項目は、属性（社会参加経験などを含む）、月経、妊娠と出産、授乳、ホルモン関係の既往症、ダイエット、閉経、更年期、更年期症状、更年期対策、更年期医療など。

18) ｽﾃﾌｧﾆｰ･ﾃﾞﾒﾄﾗｺﾎﾟｳﾛｽ（横山貞子訳）1987「からだの声に耳をすますと」　思想の科学社

女性の自我形成を男性本位の発達の枠組み（ｴﾘｸｿﾝの発達段階説）で捉えるべきでなく、女性の体、暮らしの中に見出すべきであるという主張。女性の成長、特に月経による体の変化は、女性に別人格への再生を、突然、決定的にもたらす事を指摘し、その意味で、女性は、一生に二回、初潮期と更年期に、自画像の危機にさらされる。女性の死生観は、男性にはない、体の内部からの起こる人格再生の経験から形成されるので、従来の枠組みでは理解できない。更年期後の女性は、二度の"死"を経験し、男性本位の枠組みの中での"女性性"を超えて存在する。

19) ｱﾝ･ﾌｧﾝｽﾄ･ｽﾀｰﾘﾝｸﾞ（池上千寿子、根岸悦子訳）1990「ジェンダーの神話」　工作舎

"女性性"についての偏見と誤解を、女性の立場から論じた本。ホルモンと女性の行動についての偏見、経済論理の中での医療の在り方－"「閉経という病気」は社会的問題だけでなく、ビッグビジネスなのです。(P166)"の問題点の指摘、更年期の定義など。

20) ﾏｰｶﾞﾚｯﾄ･ﾛｯｸ（鈴木実香訳）1994「女性の中年期、更年期と高齢化社会」東大出版会

日本の更年期、中年期の女性について社会学的に考察した論文。調査を基に日本における更年期女性の社会的位置、文化的背景、社会病理について論じ、海外に日本の更年期女性の実態として紹介された。

21) 野末悦子　1983　「いい女の更年期」　主婦の友社

更年期に関する正しい知識を持ってほしいという意図で、30代から60代の都市在住の女性1000人を対象にしたアンケート調査を基に、女性と更年期について全般的解説をしている。この調査では、平均閉経年齢（49才）や生理不順の開始年齢（45才）の他、それまで指摘されていた職業の有無と更年期障害の程度には、実際は差がないこと、閉経に対する感想は、喪失感よりも解放感が大きいことなどが実証された。

22) ﾐｼｪｰﾙ･ﾃｨﾘｴ、ｼｭｻﾞﾝﾇ･ｹﾍﾞｽ（目島嘉子訳）1985　「50歳の青春を貴女に」　誠文堂新光社

仏の産婦人科医とカウンセラーが、50代の女性について、歴史的、社会的に分析し「新しい自画像（ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ）」と新しい対人関係を構築する時期であると提案し、身体的、社会的、心理的アドバイスをしている。

26) 佐々木静子　1988　「あなた自身の更年期とうまくつきあってみませんか?」　草土文化社

富士見産婦人科病院事件被害者同盟の医師団に参加した女性産婦人科医である著者が、自覚症状はなくても女性の体に変化の始まる30代から、正しい知識と関心を持って、自分のからだとつきあってほしいと女性自身による健康管理の重要性を説き、図表やイラストを使ったソフトな印象で、わかりやすく具体的な説明とＱ＆Ａ形式のアドバイスをしている。

27) ｻｼﾞｬ･ｸﾞﾘｰﾝｳｯﾄﾞ(加地永都子、根岸悦子訳) 1988 「のびのび更年期」 径書房

産婦人科医である著者が、自分自身の更年期に際して、からだのあまりの変化に驚き、自ら、地域の女性専門診療所に中年期と更年期の部門を設置した経験から、1975年の HRTと子宮癌の関係についての報道以降の HRTに対する誤解や医師側の対処の問題点を指摘しつつ、更年期の体と病気についての知識を、事例をあげて、わかりやすく紹介している。子宮筋腫の治療法、卵巣機能の低下、骨粗しょう症とカルシウム補充、エストロゲン補充法について、治療法の選択肢や功罪を率直に述べてある。

31) 野末悦子 1993 「女性ホルモン最新療法」 朝日出版

HRT を受けてみたい人を対象とした女性ホルモンのしくみ、体への作用、HRT の効く症状と副作用、使えない人、HRT を始める前に必要な検査、知っておくべき疑問点更年期女性の病気と成人病を詳しく解説。HRT を実施している病院のリスト、アマラント協会の紹介。

32) 野末悦子 1993 「いい女の更年期（続）」 主婦の友社

「空の巣症候群」「更年期うつ」など、中高年期の孤独感について解説。HRT の効果やその他の療法について紹介。こころの更年期に力点をおいた本。病院リスト付。

35) 池下育子 1994 「池下育子の幸せ更年学」 海竜社

心理療法（こころ療法）とホルモン療法、漢方療法についての解説。患者が主体的に考え、医師がそれを支える関係の中で更年期症状と取り組んでいく、著者の医師としての姿勢をアピールしている。

36) 堂園涼子 1995 「更年期かしら」 主婦の友社

産婦人科の診療への不安や躊躇いを除くように、診療の目安となる症状、診療の実際、更年期にかかりやすい病気、更年期症状の治療法、パートナーとの関係、医師との接し方について、やわらかい口調で書かれている。

37) 丸本百合子 1995 「更年期をいきいきと」 時事通信

化粧品メーカーのコピー "Beauaty is not about looking young."を紹介して、更年期に対するマイナスイメージを捨てて、前向きに、自分の体と向き合い、上手につきあう為に、更年期に対する正しい認識と知識を持つよう勧めている。更年期の心と体、症状と対策を紹介し、医者とも上手に付き合って自己管理するようアドバイス。

40) 吉田茂子、越川法子 1995 「更年期を乗り切る知恵」 講談社

臨床経験と患者へのアンケートをもとに、更年期の生理的メカニズムと症例別の治療法の解説をＱ＆Ａ式でわかりやすく説明し、更年期は「私」を問い直す時期であり精神神経症状と日常、カウンセリングの有効性、食生活、運動、美容、装い、生理用品の携帯、性生活の見直しを勧めている。夫も更年期であることを理解し、夫婦で更年期を迎えるという発想を持つように言う。

42) ｽｰｻﾞﾝ・ﾍﾟﾘｰ、ｷｬｻﾘﾝ・A・ｵﾗﾝﾊﾝ(浅野輝子、他訳) 1995 「素敵に更年期！」 風媒社

ﾉﾝﾌｨｸｼｮﾝ作家と女医が、更年期に自分の体内で起こっていることを正しく理解してまずは、月経の自己管理(記録) をすること、ホルモンの働きやストレスの解消、性生活にも、ハーブ(漢方) の効果があると主張。更に、食事と運動と肌の手入れ(美容) についても自己管理することで更年期は乗り切れると言う。

66) ﾍﾞﾃｨ・ﾌﾘｰﾀﾞﾝ(山本博子、寺澤恵美子訳) 1995 「老いの泉」 西村書房

「更年期のない女性達」の存在を確認すべく、調査してみた結果、「老い」の二面性、若さへの囚われのない生き方のか実在することに驚き、社会的囚われのない人生の新天地で「老い」を見取り、「老い」を迎えることの意味を問う。

Ⅴ. 資料

〔和文文献リスト〕

【女性自身の視点での更年期】
1) 玉谷直美編 1981 「美しき午後へのスタート」 女子パウロ会
2) 吉武輝子、沖藤典子、他 1981 「シリーズ今を生きる 41才」ユック舎
3) ﾛｾﾞｯﾀ・ﾗｲﾂ (池上千寿子、根岸悦子訳) 1983 「積極的に生きる更年期」 鎌倉書房
4) 駒野陽子、他 1985 「更年期を生きる ― 第三ステージの開幕」 学陽書房
5) ｱﾝ・ﾏﾝｺｳｨｯﾂ (渥美桂子他訳) 1986 「更年期と個性化 ― 夢分析を通して」 創元社
6) ｼﾞｪｰﾝ・ﾌｫﾝﾀﾞ (堂浦恵津子訳) 1987 「ｼﾞｪｰﾝ・ﾌｫﾝﾀﾞ からだ術こころ術」 晶文社
7) 樋口恵子、佐々木静子、他 1992 「シリーズ今を生きる 51才」 ユック舎
8) ｹﾞｲﾙ・ｼｰﾋｰ(樋口恵子訳、堀口雅子監修) 1993 「沈黙の季節」 飛鳥新社
9) ｹﾞｲﾙ・ｻﾝﾄﾞ (田辺希久子) 1994 「４７歳の私に起こったこと」 大和書房
10) ｺﾚｯﾄ・ﾀﾞｳﾘﾝｸﾞ(実川元子訳、落合恵子監修) 1996 「ﾚｯﾄﾞ・ﾎｯﾄ・ﾏﾏ」 徳間書店
(結婚・夫婦の視点)
11) 藤原はる美 1993 「午後の伴走者」立風書房
12) 元岡典子 1996 「ある夫婦のかたち」 三五館
(女性団体による調査)
13) 女たちの ﾘｽﾞﾑ編集委員会 1982 「女たちのﾘｽﾞﾑ 月経・ｶﾗﾀﾞ のﾒｯｾｰｼﾞ 」 現代書房
14) 高槻女性学ｸﾞﾙｰﾌﾟ 1987 「更年期ってなあに: 更年期の過ごし方ｱﾝｹｰﾄ 調査より」
15) 生活ｸﾗﾌﾞ 生協連合会編 1994 「更年期から楽しくなる」 生活ｸﾗﾌﾞ 生協連合会
【社会学・女性学の視点からの中高年期・更年期】
16) 袖井孝子 1979 「収穫の世代 中高年の生活構造」 垣内出版
17) 袖井孝子 1979 「中高年女性学」 垣内出版
18) ｽﾃﾌｧﾆｰ・ﾃﾞﾒﾄﾗｺﾎﾟｳﾛｽ(横山貞子訳) 1987「からだの声に耳をすますと」 思想の科学社
19) ｱﾝ・ﾌｧﾝｽﾄ・ｽﾀｰﾘﾝｸﾞ(池上千寿子、根岸悦子訳) 1990 「ジェンダーの神話」 工作舎
20) ﾏｰｶﾞﾚｯﾄ・ﾛｯｸ (鈴木実香訳) 1994「女性の中年期、更年期と高齢化社会」東大出版会
【女性医師の視点からの更年期】
21) 野末悦子 1983 「いい女の更年期」 主婦の友社
22) ﾐｼｪｰﾙ・ﾃｨﾘｴ、ｼｭｻﾞﾝﾇ・ｹﾍﾞｽ (目島嘉子訳) 1985 「50歳の青春を貴女に」 誠文堂新光社
23) 主婦の友社編 1986 「図解更年期障害の治し方」 主婦の友社
24) 藤巻京子 1987 「更年期の医学相談」 光書房
25) ﾄﾞｸﾄﾙ ﾁｴｺ 1987 「女の快適更年学」 海竜社
26) 佐々木静子 1988 「あなた自身の更年期とうまくつきあってみませんか?」 草土文化社
27) ｻｼｬ・ｸﾞﾘｰﾝｳｯﾄﾞ(加地永都子、根岸悦子訳) 1988 「のびのび更年期」 径書房
28) 堀口文 1990 「女ざかりのからだノート」 婦人画報社

29) 東畑朝子　1993　「更年期からの素敵ダイエット」　海竜社
30) 影山邦子　1993　「更年期障害 ｲﾗｽﾄ わかる指圧」　ユリシス出版部
31) 野末悦子　1993　「女性ホルモン最新療法」　朝日出版
32) 野末悦子　1993　「いい女の更年期（続）」　主婦の友社
33) 堀口文　1993　「"わたし"を探す更年期」　ネスコ
34) 中村知子　1994　「５０歳から「自分のからだ」とどうつきあうか」　大和書房
35) 池下育子　1994　「池下育子の幸せ更年学」　海竜社
36) 堂園涼子　1995　「更年期かしら」　主婦の友社
37) 丸本百合子　1995　「更年期をいきいきと」　時事通信
38) 池下育子　1995　「明るく楽しく過ごす女性の更年期」　日東書院
39) 杉山みち子　1995　「更年期の保健学」　第一出版
40) 吉田茂子、越川法子　1995　「更年期を乗り切る知恵」　講談社
41) 吉田茂子　1995　「更年期障害は漢方で治せる」　リヨン社
42) ｽｰｻﾞﾝ･ﾍﾞﾘｰ、ｷｬｻﾘﾝ･Ａ･ｵﾗﾝﾊﾝ（浅野輝子、他訳）1995「素敵に更年期！」　風媒社
43) 野末悦子　1996　「更年期」　主婦の友社
44) 井口登美子　1996　「更年期と女性の病気が気になる人へ」　東洋出版
【女性の医学全般・心理学（女性医師）】
45) 野末悦子　1986　「女性のからだ　生理と病気の基礎知識」　新日本出版社
46) 野末悦子　1990　「女のからだBook」　主婦の友社
47) 岡本祐子、松下美智子　1994　「女性のためのライフサイクル心理学」　福村出版
【母性保護／職場での健康】
48) 野末悦子　1988　「老人ホームに働く女性の健康管理」　筒井書房
49) 丸本百合子、岡村美穂、中野麻美　1988　「はたらく女性と健康」　労働旬報社
50) 後藤筋子、足立恵子　1996　「テキスト：母性保護」　名古屋大学出版会
【老い／生き方】
51) ﾎﾞｰｳｫｰﾙ･Ｓ（朝吹三吉訳）1972「老い」上・下　人文書院
52) ｶｳﾌﾏﾝ･Ｓ（幾島幸子訳）　1988　「ｴｲｼﾞﾚｽ･ｾﾙﾌ　―老いの自己発見」　筑摩書房
53) 重兼芳子　1984　「女の老い支度」
54) 吉武輝子　1984　「素敵に女の老い」　海竜社
55) 樋口恵子　1986　「生き上手は老い上手」　海竜社
56) 樋口恵子　1937　「私の老い構え」文化出版局
57) 村山リウ　1989　「はなやぐ老い」　人文書院
58) 樋口恵子　1989　「ローバは一日にしてならず」　文化出版局
59) 樋口恵子　1990　「40代からの老い支度」　海竜社
60) 上野千鶴子 1990「40歳からの老いの探検学」　三省堂
61) 小室加代子　1993　「女・思秋期・元気が一番」大和出版
62) 落合恵子　1993　「自分を生きる女の本」主婦と生活社
63) 柴田頼子、他　1994　「35歳　女の危機」リバティ書房
64) 森岡海子　1995　「母と私の老い支度」　未来社
65) ｼﾞｭｰ･ｱﾚｸｻﾞﾝﾀﾞｰ 他（久慈美貴・黒田絵美子訳）1994「女、老いて輝くために」西村書店
66) ﾍﾞﾃｨ･ﾌﾘｰﾀﾞﾝ（山本博子、寺澤恵美子訳）1995「老いの泉」　西村書店

【男性の視点での中高年期の女性】
67) 斉藤茂彦　1982　「妻たちの思秋期」毎日新聞社
【男性医師の視点での更年期】
68) ﾛﾊﾞｰﾄ･Ａ･ｳｨﾙｿﾝ（増淵一正訳）1967　「永遠の女性」　主婦と生活社
69) ﾏﾃﾞﾘｰﾝ･ｸﾞﾚｲ（杉靖二訳）　1969　「ようこそ更年期」
70) 九嶋勝司　1974　「更年期のはなし」　同文書院
71) 倉智敬一　1984　「更年期こそ豊かな日々を」　ごま書房
72) 一宮勝間　1984　「女・からだの気働き」　合同出版

73) 西川潔　1986　「美しく生きてバラ色の更年期」　合同出版
74) 樋田勝間　1986　「女ざかりの医学 ― 35才からの健康ノート」　創元社
75) 本多洋　1987　「更年期教室」　同文書院
76) 浮田俊彦　1990　「ﾅｲｽﾚﾃﾞｨのあなたに　更年期障害と肥満」　北国新聞社
77) 藤田拓男　1990　「更年期から女性に多い骨粗鬆症」
78) 一の瀬尚道、小滝周曹　1991　「イライラするあなたに」　曜曜社出版
79) 明治生命厚生事業団　1991　「豊かな心をやしなう」　明治生命厚生事業団
80) 村田高明　1992　「上手ﾊﾞﾂきあう 更年期障害の正しい知識」　全日本病院出版会
81) 菅原正朝、菅原明子　1993　「更年期障害は治る」　婦人生活
82) 斉藤茂太　1993　「茂太さんのこころの特効薬」　二見書房
83) 小山嵩夫　1993　「すてきな女性の更年期」　講談社
84) 小山嵩夫　1993　「ＨＲＴﾎﾙﾓﾝ療法はこんなに効く」　主婦と生活社
85) 小山嵩夫　1993　「女性成人病」　学習研究社
86) 小山嵩夫　1993　「更年期なんて怖くない」　法研
87) 倉智敬一　1993　「更年期は第三の人生の出発点」　ごま書房
88) 美馬宏夫充　1994　「こんにちは！更年期」　二見書房
89) 松原英多　1994　「愛する女性に更年期はない」　講談社
90) 名取荘夫、他　1994　「女ざかりの更年期」　ビジネス社
91) 阿部徹良　1994　「更年期であるということ」　学陽書房
92) 小山嵩夫　1995　「月経：自分でチェックしよう」　マガジンハウス
93) 小滝周曹　1995　「すてきに過ごす更年期」　日東書院
94) 小川隆夫、朝倉哲文　1995　「更年期を上手に乗り切る本」　主婦と生活社
95) 劉影　1995　「病気にならない養生ガイド」　晶文社
96) 福島毅　1995　「更年期障害 ｲﾗｽﾄ わかる漢方」　ユリシス社
97) 柏木純一　1995　「おとうさんの更年期」　毎日新聞社
98) 秋山尚美　1996　「いい女のホルモンバランス」　ぎょうせい
99) 青木高充　1996　「すぐできるホルモン補充療法」　三輪書店
【医学専門書】
100)松浦篤実、他　1957　「更年期障害」　創元社
101)九嶋勝司　1958　「更年期」　医学書院
102)長谷川直義　1972　「更年期の不定愁訴」　金原出版
103)森一郎、他　1974　「更年期障害」　医学書院
104)村松功雄　1975　「中年期の女性」　東出版
105)東条伸平　1977　「女性のからだとその機能」　東山書房
106)岡村靖　1977　「更年期障害」文研出版
107)馬島秀麿　1979　「更年期障害」　金原出版
108)坂本洋一、他　1979　「図説臨床産婦人科講座」老年婦人科学　ﾒｼﾞｶﾙﾋﾞｭｰ社
109)高木繁夫、柳沢洋二　1980　「更年期障害」　医学図書出版
110)玉田太朗編　1985　「更年期老年期の婦人科学」　金原出版
111)斉藤信彦　1985　「更年期の医学」　立風書房
112)室岡一、他　1986　「生涯産婦人科学」更年期老年期　金原出版
113)荻原博　1989　「Pearl Memory」　日本家族計画協会
114)斉藤信彦　1989　「更年期の医学」　立風書房
115)城仙秦一　1989　「更年期障害と病気」　理学社
116)筒井末春　1989　「心身医学的にみた更年期の臨床」　新興医学出版社
117)本庄英雄　1993　「更年期老年期外来マニュアル」　金芳社
118)青野敏博　1994　「臨床医のための女性ホルモン補充療法マニュアル」　医学書院
119)太田博明編　1994　「更年期女性のヘルスケア」　医療ジャーナル社
120)麻生武志　1994　「中高年女性の健康管理」　メジカルビュー社
121)青野敏博編　1996　「更年期外来診療プラクティス」　医学書院

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

I．　調査方法

1)更年期、または、更年期の女性について書かれた日本で刊行された和文の文献(翻訳文献を含む)、および、雑誌・新聞記事について、可能な限り遡ってリスト化し、年代ごとの視点や内容の変化を分析する。